

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第2回 第2.3節～第2.5.1節

2018年1月15日

小田 勝

連載第2回は、39頁、音便の続きから。和歌中の音便の例は珍しい。39頁の◆に3例あげたが、もう1例追加しておく（形容詞の音便形であるが）。

・曇りなう鏡の上にある塵を目に立てて見る世と思はばや（山家集）

40頁「2.3.3 撥音便」では、次のような例もある（「住み」の撥音便）。

・雲林院に住む侍りけるころ（法華百座聞書抄）

41頁「2.4.1 自他の対応」。初刷・2刷では、43頁12行目、②Aのリストの中に「見る～見す」があげられているが、これは両方とも他動詞なので（「他動詞～複他動詞」の対。§2.4.2）、誤り。第3刷で削除されている。この語彙リストは例示ということで、追加し出せば切りがない。①Aに「続く・和む・懐く」、①Bに「萎る」、②Aに「通る～通す・直る～直す・乗る～乗す」、③Aに「弊ゆ～弊やす・悩む～悩ます・鳴る～鳴らす」、③Bに「詰む～詰まる」、(7a)に「注く・楽しむ・慎む・馳す」くらいを追加しようか。(7)に「自他両用の語」をあげたが、漢語のサ変複合動詞にも自他両用の語は多い。一例をあげれば、「安堵す・饗応す・具す・薫ず・現ず・散ず・辞す・成ず・損ず・存ず・流布す」など。(7a)の「積む」は自他両用だが、自動詞形に「積もる」もある。「添ふ・整ふ」は①Aタイプだが、自動詞形に「添はる・整ほる」もある。自他の対応の一方に2形あるものとしては、44頁の4つ目の◆に示したほか、「紛る⇔紛らす・紛らはす」「うるふ・うるほふ⇔うるほす」などがある（現代語でも「つながる⇔つながぐ・つなげる」「縮む・縮まる⇔縮める」「まじる・まざる⇔まぜる」のような例がある）。「乱る」は下二段が自動詞で四段が他動詞（①B）だが、四段が自動詞としても用いられ、他動詞形「乱す」もある（②Aでもある）。

45頁用例(8)～(11)の類例を追加する。

・「風吹きぬべし。御船返してむ」と言ひて、船返る（=返す）。（土佐）

・木の葉散る（=散ラス）嵐や御簾をあげつらん払ふに惜しき塵（=紅葉）の積もれる（頼政集）

用例(12)(13)の類例としては、次のようなものがある。

・夜になして (=夜ニナルノヲ待ッテ) 京には入らむと思へば (土佐)

・長月つごもりに、月たてて (=翌月ニナッテカラ) とおぼしきにや (一条摂政御集)

「人をしづめて出で入りなどし給へば」(源・夕顔) が「人が寝静まるのを待って」の意であることは、116 頁の◆に記述がある。動詞の自他の理解が古典文解釈に重要であることは、近刊の『読解のための古典文法教室』の例題 [17] [18] にも示した。

45 頁「2.4.2 複他動詞」。他に、例えば「疎む^{うと}」など。「疎む」は四段が他動詞①で「嫌う」、下二段が他動詞②で「嫌いにさせる」の意である。

第 2.4 節は「動詞の自他」を扱い、第 2.4.4 節まで立っている。この後に、例えば次のような節が新設されようか (ただしまだ充分書けてはいない)。

2.4.5 他動詞の再帰的用法(新設)

他動詞が、「主語が自分自身を…する」の意で、自動詞的に用いられることがある。

(1) 三室山おろす嵐のさびしきに妻呼ぶ鹿の声たぐふなり (千載 307)

動詞「搔き払ふ」は(2a)のように「払いのける」の意の他動詞であるが、(2b)では自動詞的に用いられて「すべてなくなる」の意を表している。

(2) a 涙のこぼるるを搔き払ひ給へる [源氏ノ] 御手つき (源・須磨)

b またあらじ、あがりての世に、かく大臣・公卿七、八人、二、三月の^{うち}中に搔き払ひ給ふこと。(大鏡)

48 頁「2.5.1 動詞の意志性」。現代語では、意志性を異にする複合動詞を形成することができないが (影山太郎 1993) 、

・売れ残る / *売れ残す / *売り残る / 売り残す

古代語では次のような例がある。

・秋の野に狩りぞ暮れぬる女郎花こよひばかりの宿も貸さなん (後拾遺 314) <=狩リゾ暮ラシヌル>

・後の世は明日とも知らぬ夢のうちをうつつがほにも明け暮らすかな (秋篠月清集)
<=明カシ暮ラスカナ>

次例は 49 頁用例 (2) の類例である。

・賀茂川にや落ち入りなまし。(宇治 6-6) <=飛ビ込ミ>